
モノクロの世界で。

渚科。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロの世界で。

【Nコード】

N2737BA

【作者名】

渚科。

【あらすじ】

図書館の中庭。

そこに集まる暇人の話。

いつもの場所。

side 佑

木製のベンチ。

青々と茂ってる芝生。

太陽を隠してるような

おっきな木の下。

ここが今のあたしの居場所。

図書館の中庭はいつも人が少ない。てかない。

他の利用者は知らないのかな。

ここ超快適空間ですよー！

冬はちょっと寒いけど、

この木の下は日差しは柔らかくてぽかぽか気持ちいい。

図書館の掃除のおばさんが毎日頑張って育てた、白やピンクの花の香りはあたしを幸せな気分させてくれる。

ということ、この庭はあたし、

未森 佑「ミモリユウ」のお気に入りの場所になってます。

図書館であたしの大好きな池谷翔先生の小説を借りてこの中庭のベンチで読む。

誰も干渉することのないこの空間は、最高に居心地がいい。

ビバ、読書ライフ！

いつもの佑。

* s i d e 佑 *

中庭で1人わくわくしながら借りてきたばかりの小説を取り出す。
もちろん池谷先生の本だ。

池谷先生の本の題名はいつも漢字一文字で、その一文字のなかにお話の意味を全て込めるといのが彼の本への愛情らしい。

あたしが今持つてるのは”灯”という本。

基本あたしはあらずじを読まない派。

1回読み終わってから読み直す時に読む事にしてる。

だから、手にとってすぐ1ページ目を開く。

1文字ずつ、ゆっくりと読んでいくと階段を降りるみたいにあたしの意識は本の中へと入っていく。

- - - - -

* s i d e 翠斗 *

「未森？」

俺が目の前で手を振ってもなんの反応もない。

…ダメだ。完全に読書モードだ。

これだから嫌なんだ！

毎回毎回中庭来る度にいつものベンチで本読んでるこいつ。

ちいせえ時からずっと一緒にいる幼馴染がいるから、あたりまえに声かけてんの綺麗にシカトしやがる。

ぶっちゃけると、俺はそこそこ人気のある方だと思う。学力も運動神経も中の上。見た目は…3日に1回は告られるくらいだ。

笹鳴翠斗「ササナキスイト」と書いてある俺の下駄箱には、週1ペースで手紙がはいってる。

だからほとんどの女子は俺が声をかければ、そんなにしてても必ず振り返る。

そんな俺をシカトすんのはこいつぐらいしかいねえ。

声かけて目の前で手え振り回してんでシカトされるなんて、まわりから見れば俺は完全に不審者だ。

だけど都合のいい事にここにはなかなか人が来ない。

俺はいつものベンチ、未森のベンチの向かい側のそれに腰掛けた。

いつもの人達。

side佑

「みつもりいーん！」

語尾に音符やら星やら付きそんな言葉と一緒に、あたしの目の前にあった本がなくなった。その代わりに、ある先輩の顔がどアップで目に映った。

「牧村先輩、本返してください。」

「やだよー。・牧村先輩・じゃなくて、”類”って呼んでくれたらしいよっ！」

「…おい能天気阿呆男、本返しやがれ！」

「類って呼んで？」

…ああもうこの人嫌だああああ！

この能天気阿呆男こと牧村類「マキムラルイ」先輩はあたしのいっこ上の高校2年生だ。容姿端麗・運動神経抜群・親は貿易会社の社長さんという、どこの恋愛小説の主人公だよっつー完璧男だ。

しかあし！こいつはなぜか事あるごとに、あたしに絡んでくる変態なのだ！

「類先輩、本返してやってください。」

お？誰の声だ？あたしの視界は変態によって塞がれているので、ほぼ牧村先輩しか見えない。

体を右に傾けてみると、そこにはあたしの幼馴染の姿があった。

「あ、翠斗だ。」

「『あ、』じゃねえこのあほう！おめえ、また俺の事シカトしやがって俺不審者みてえじゃねえか！」

「うそ、ごめんごめん。悪気はなかったんだ、ちよつとしか。」

「ちよつとはあったんじゃねえか！お前まじでしばくぞ！」

このちよいヒステリックな幼馴染により、あたしの池谷先生の本は取り返された。

翠斗とあたしと牧村先輩で騒いでいると、図書館のほうからあたしの心の師匠が現れた。

「なあに？また類がなんかやらかしたの？」

「唯先輩、この変態どうにかしてくださいよお。」

「ええ！変態ってひどいよ！てかなんで唯は名前呼び出しなのに俺だけ苗字なのさあ！」

「うつさいよ類。君が変態である事には変わりないんだから、黙って佑ちゃんに謝んなさい。」

流石です、唯先輩！この椎名唯「シイナユイ」先輩は、あたし、翠斗、牧村先輩の高校である泉が丘学園の生徒会長で、牧村先輩を黙らせられるお方なのです！

そしてこの人も牧村先輩と同じ様なスペックの持ち主さんなのだ！

「だってね、みもりんがね、俺のこと類って呼んでくれないからさあ…」

「いいから謝れ。じゃないと今度の学園祭の生徒会長スピーチで君が変態である事を全校生徒の皆さんにバラすぞ。」

「すいませんでしたあああ！」

「うわ、すげえスライディング土下座…椎名先輩恐るべしだな。」

牧村先輩の頭はあたしの足元にあるまま、ピクリとも動かない。

「あの、牧村先輩？大丈夫ですk」「てい！みもりんの今日のパンツ水玉！」

「やめいあほ！どこに謝ったばっかなのに後輩のスカートめくる奴がいるんだ！」

「…おい変態、いつぺん死ね。」

「すいません類先輩、俺にはこの人達を敵にまわす勇氣はありません。」

「ひどいよ翠斗お！ってちょい待って！せめてパーでお願いします

ううう！！」

そしてこの後、あたしと唯先輩によって牧村先輩は30回ほど土下座する事になりました。

デートの誘い方

side 翠斗

いつもこんな風に4人で馬鹿騒ぎしてる。俺らの泉が丘学園の斜め向かいにあるこの図書館は、放課後に集まるにはちょうどいい。

…あー、まだ先輩土下座してるよ。
そろそろ止めねえとだな。

「おおーい、ちょっと類先輩可哀想になってきたんで、やめてあげてください。地面に頭なすりつけすぎてハゲちゃいますよ。」

「翠斗っ、俺を心配してくれんのかあ！なんていい後輩なんだっ！
類感動！！」

「翠斗君は頭髮限定で心配してくれてるんだ。君の事は心配していない。」

「牧村先輩まだ土下座したいんじゃないですか？毎回怒っても変態行動繰り返すなんて、まるで怒って欲しい人みたいじゃないですか。」

うわ手厳しい。俺が先輩だったら耐えらんねえな。

…つか、

「……類先輩ってMだったんすね…。」

「のおおおおー！俺はマゾじゃないいいい！」

「ウザいですよ先輩。うざったいのはその顔と行動だけにしてください。ていうか行動もやめてください。」

「ひ、ひどいよみりん……」

「みもりんって呼ぶのもやめて下さい気色悪い。」

「……もう俺悲しくて死んじゃう……。」

「君が悪いんだろう。でもごめんね佑ちゃん、これ以上言い続けるとほんとにこの人自殺しかねないから止めてあげて。我が校から自殺者を出さないために。」

てことは椎名先輩、類先輩が泉が丘の生徒じゃなかったら末森のこ
と止めなかったんですね……。

「うううう……分かりましたあ……。」

「そんな名残惜しそうな顔しないで。とことんサディストだね佑ちゃん。……じゃあこの人の代わりに、お詫びと言ったらアレだけど、明日お茶でもどうか？」

椎名先輩、誘い方が完全に男前です。なんか自分負けた気がします。今度機会があれば椎名先輩を見習います。決して類先輩ではなく。

「えっ本当ですか！？先輩が嫌じゃなければ、是非お願いします！」

まあこいつは椎名先輩を心の師匠って思ってるからな。断るわけ無いよな。

「えええ、なんでみもりんと唯がデートすんのさあ！俺だってみもりんとデートしたい！俺も明日ついてく！」

おいこの人何言ってるんだよ！なんで先輩と未森がデートっ…俺だつて未森とお茶なんて飲みに行ったことないのに！…あれ、椎名先輩こっちガン見してる？

「…じゃあ君もついてきていいけど、翠斗君も一緒じゃ無いとだめ。」

えええ！椎名先輩なんていい先輩！どっかの変態先輩とは違うんだなあ…。

「じゃあ翠斗お一緒に付いてきてよお、付いてくるだけでいいから。10m後ろからでいいから。」

「…ぴったり後ろにお供します。」

明日の放課後、お茶会開催

待ち合わせ

side 翠斗

眩しい朝日が青いカーテンの隙間から輝いてくる。

それは全然清々しくなんなくて、朝起きたばかりの人間にとっては迷惑以外の何者でもない。まあ、太陽に迷惑だかなんて言えないから、次からはしっかりカーテンを閉めることにする。

今日は中庭の4人でお茶を飲みに行く。…うん、不自然。おかしくねえか？高校生男女4人組がお茶飲んでたら。

でもそんなこと言っても、待ち合わせの午前11時は刻々と迫って行ってる訳で。俺は急いで準備をして、待ち合わせ場所である学校の裏口に向かって走った。

俺が着いたのは10時45分。先に類先輩がウロウロしてたから声をかけてみる。

「先輩おはようございます。早いですね、何時に着いたんですか？」

「あ、翠斗おはよ。俺？俺は9時ぐらいかな？」

早っ！

「…異常に早くないですか？」

「そう？なんか楽しみすぎて寝られなくてさ、早く家出てきちゃっ

た
」

遠足前の子どもかつ！カバンのなかバナナとか入ってないよな！？

「ごめん、遅れたかな？おはよう翠斗君、類。」

「おはようございます椎名先輩。ちょうど１１時だから遅れてませんよ。」

「おはよー唯。」

「…類、君目の下クマできてないか？」

「ああ、これは昨日楽しみすぎて眠れなくて…。」

「遠足前の子供か君は！まさか遠足のおやつとかいってバナナとか持ってきてないだろうな？」

椎名先輩ありがとう！俺が言いたいこと全部言ってくれた！あ、ちなみにカバンのなかにバナナは入ってませんでした。

「…未森遅いな。」

ただいま１１時１０分。遅刻とかが嫌いな未森が遅れてくるなんて珍しい。

「…っお、遅れましたあ…！」

「おっはよおみもりん！大丈夫？なんで息切れ？」

遅れてきた未森は、明らかに肩で息をしている。

「あ、実は今日が待ち遠しくって、あんまり寝付けなくて。寝たのが5時ぐらいだったんで寝坊しちゃって…。」

「そうなの？俺も眠れなかったんだあ！」

「牧村先輩もなんですか？やっぱり寝れませんよねっ！」

「……。」

もう俺と椎名先輩は黙るしかない。類先輩が2人もいるううっ！

「…うん、じゃあ行こうか。とりあえずどこ行く？」

「はいはい！俺駅前のショッピングモールいきたい！」

「はいはい。じゃあ行きましょうか。」

こうして俺たちは駅前に向かった。

うさちゃんど。

side翠斗

「うつわー、広いねえー！」

駅前のショッピングモールは、中高校生がよく集まるところだ。

俺も友達と何回も来てるから、未森のセリフにはちょっとびっくりした。

「…もしかして未森、ここ来たことないのか？」

「うんっ！休みの日はらいつつも図書館にいるもん！」

何時代の女子高生だお前。未森は男子からよくかわいいって言われてて人気があるし、牧村先輩以外には誰に対しても優しいから女子からも好かれてる。だから遊び相手がいないっつー訳じゃないんだろうけど。どんだけ本好きなんだよ…。

「あ！唯先輩、あの雑貨屋さんすっごくかわいいです！」

「ん？ああ本当だね。ちょっと見に行こうか。」

そこは女子でごっちゃんごちゃしてる人気の雑貨屋だった。これ俺らも入んの？入りずれえ…

「あ、見て見て翠斗お！このうさちゃんめっちゃかわいいんだけどお！」

って言ったのは未森ではなく類先輩で。

「高2男子が”うさちゃん”てなんですか気しいなあ。」

「ひどいつ！いいじゃんうさちゃんはうさちゃんだしくまさんはくまさんだもん！」

…これでなんで顔いいんだろうこの人。勿体無い感ハンパねえ。

「あ、翠斗君。その人の見張りは頼んだよ。私は佑ちゃんとちょっといろいろ見てくるね。」

「あ、はい…。」

「じゃあ12時30分にマク。ナルド前集合で。」

あの女子だらけの店にはいなくて済むことになった俺は、おとなしく椎名先輩に従った。

中庭4人組、ショッピングモールにて男女別行動始めました

女子の場合。

女子の場合。

side唯

1番の危険人物を佑ちゃんから離すことに成功した私は、佑ちゃんとお店を見てまわる事にした。

佑ちゃんはここに来た事がないらしく、どこのお店に行っても”かわいー”とか”もふもふー”とか言っていて楽しんでいる。

佑ちゃんは私にとって妹のような存在だ。背は150cmぐらいで、目はクリクリと大きく、蜂蜜のような光沢のあるハニーオレンジの腰までであるのではないかというほど長い髪を緩く巻いている。顔は小さく整っていて、アニメかなんかの主人公みたいな顔をしている美少女だ。そして私の事を慕ってくれている上、誰にでも優しいこの後輩の事を嫌いになれるはずもない。つまり、私はこの佑ちゃんが大好きだ。

「先輩っ。このストラップすごく綺麗です！きつと先輩に似合いますよー！」

そうはしゃいで言う彼女の手には、紫の石にYと書かれているキーホルダーだ。

「本当だ、綺麗だね。じゃあ佑ちゃんにはこれが似合うんじゃないかな？」

そう言って私が取って見せたのは、白の石にYと彫ってあるキーホ

ルダー。

「うわぁこれかわいい！あたしこれ買います！」

「あ、じゃああたしも買おうかな。佑ちゃんとおそろい。」

「えっ、先輩とおそろい！？やったぁー！」

すごく喜んでくれた彼女をかわいいと思いながら、こんなことしたら翠斗君に嫉妬されちゃうかなあ…とも思う。

多分、というか絶対翠斗君は佑ちゃんのことが好きだ。今日このあ
と合流したら聞いてみようと思う。

「…ねえ佑ちゃん。」

「はい？」

「これさ、翠斗君達にも買っていつてあげよう。」

そうすればきつと彼の機嫌も悪くはならないだろう。…なんでこんな
フォロー入れなくちゃいけないんだ。私は女だぞ。

「翠斗と牧村先輩にですか？」

「ん？ああ、類はどうでもいいんだけど、翠斗君には類の見張りを
頼んでしまったから、せめてものお詫びに、と思ってね。」

「そうなんですか？…じゃあ何色にしますか？」

「類はピンクだな。」

頭の中真っピンクだからな奴は。

「ああー…そんな感じしますね。」

「じゃあ翠斗君は何色？」

「……黒？」

「あー分かる分かる。なんか”ブラック”って感じだもんね。」

「はいっ！じゃああたし買ってきますね！」

「ちょーつと待つて。佑ちゃんは翠斗君の買ってあげて？」

「？…分かりましたっ！買ってきますねーっ。」

…ふう。まあこれで翠斗君に睨まれないで済むかな。

私はピンクのRのストラップをもってレジへと向かった。

男子の場合。

side類

”うつさちやああん！”とか”きゃあかわいい！！”とか翠斗に引かれながら、ただいまうさちゃんストラップ鑑賞中。

「先輩、キモいつす。それ先輩がつけてたら、俺完璧他人のフリしますからね。」

「うわあひどい！なんて後輩なの！？先輩悲しい！」

「語尾にやたらと”！”つけないでくださいよ。だって先輩がそのうさぎつけても似合いませんし。」

「うるさいよつ。どおせ頭ん中では『未森だったら似合うのに……』とか思ってたんだろお？」

「！！！！」

うわあ顔真っ赤。凶星だなこれ。

「ふうううん？そうなんだあ。頑張ってたまえしょーねんっ？」

「…っ！じ、じゃあ先輩はどうなんですか！未森にいつつもちよつかいだしてるじゃないですか！」

「んー？いやからかった後の反応が面白くてさ。別に特別な感情はないよーん。」

…あからさまにホッとしたなこんにゃろ。

そのまま黙々と歩いていると、石に文字を彫つてあるアクセを売つてゐる店に着いた。

「ん？翠斗どしたの？」

翠斗の手にはYと彫つてある石。

「…もしかして未森ちゃんに？」

「えっ！いいいやべべべつにそんなわけないじゃないですかあはははは。」

いや嘘下手くそだね。

「いいんじゃない？別にあげたら喜ぶと思つよ？」

「…だって…もしこれであげてキモいって言われて嫌われたら…。」

あーそういう悩みね。んーまあ未森ちゃんはそんな子じゃないと思うけど。

「翠斗はみもりんにメロメローっ。」

「ちょっと先輩面白がつてません！？後輩が悩んでるっていうのに…。」

「だって面白いんだもん！」

「いやそんな堂々と言われても…。」

「いや、ねえ？このいかにも”俺、青春ど真ん中です！”みたいなのを見てるのって面白いんだもん。」

「…じゃあ先輩には好きな人いないんですか？」

「ん？さあどーでしょう？」

「自分だけ隠すとかズルいつすよ！教えてくださいよお！」

「翠斗がみもりんと付き合えたらね。」

「ひど！」

翠斗とふざけてたら、唯から電話がかかってきた。

「はいはいこちら類くん。」

『ちょっと君なにしてんのさ！待ち合わせ時間30分もすぎてるよ』
『！』

「うわあやばい。唯怒ってる…」

「ごめん！今すぐ行くから！」

『じゅーっ、きゅーっ、はーち…』

「やばい翠斗！マ。クにダッシュ！」

「ええ？つてもうこんな時間！？やばい絶対未森怒ってる！」

結局石は買わないまま、俺達はハンバーガーショップまで全力疾走した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2737ba/>

モノクロの世界で。

2012年1月9日20時48分発行